

科学と社会委員会（第24期・第4回）議事要旨

1 日 時 平成30年7月6日（金） 15:00～17:55

2 場 所 日本学術会議5階 5-A（2）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、小林 傳司（第一部会員・副委員長）、
小安 重夫（第二部会員・幹事）、高橋 桂子（第三部会員・幹事）、
遠藤 薫（第一部会員）、藤原 聖子（第一部会員）、松浦 純（第一部会員）、
西村 いくこ（第二部会員）、古谷 研（第二部会員）、中村 崇（第三部会員）、
沖 大幹（連携会員）、蟹江 憲史（連携会員）
（説明者）川口 慎介（連携会員）、岸村 顕広（連携会員）、西嶋 一欽（連携会員）、
（欠席） 甲斐 知恵子（第二部会員）平井 みどり（第二部会員）、坪井 俊（第三部会員）、
藤井 良一（第三部会員）、新福 洋子（特任連携会員）
（事務局） 桑川参事官、酒井参事官補佐、鳥生審議専門職、奥野審議調査専門職

4 議事要旨

（1）若手アカデミーのSDGsの取り組み紹介

●若手アカデミーの会員である岸村委員、西嶋委員及び川口委員より紹介があった。要旨は以下のとおり。

- ・従来の分野別では解決困難な課題に柔軟に対応するため、若手アカデミーの下に4つの分科会①若手による学術の未来検討分科会、②若手科学者ネットワーク分科会、③イノベーションに向けた社会連携分科会、④国際分科会を設けている。分野別では困難な課題、特にSDGs等の複雑な課題、既存の枠組みでは解決しにくい課題に取り組む場合には、力を発揮できる。
- ・昨年9月に、SDGsについて考える集会を23期の若手アカデミー副代表である狩野光伸先生が開催し、学者だけではなく高校生や様々なステークホルダーの人たちが集まった。SDGsと学術を進めるためにどういったものが必要かの議論を行っており、同年12月にフォローアップのワークショップを開催した。
- ・SDGsを持続的に進める上では、国際的な文脈での持続性の観点からのグローバルな協力、地域間での連携と国内の持続性の観点からの人材育成、地方創生がある。
- ・諸外国との連携では、グローバルヤングアカデミー（GYA）、各国若手アカデミー（NYAs）との集まりがあり、SDGsの絡みから若手アカデミーがどのように貢献できるか、科学的助言、科学コミュニケーションや若手科学者トレーニングして行くにはどうしたらよいか等の声明が出されている。問題意識としては、日本の若手アカデミーも賛同して活動している。また、アジアでの各国若手アカデミーとの連携も強化しており、我々が積み上げてきた歴史・経験を伝えて、彼らの持続性にも貢献できると考えている。
- ・若手アカデミーの国際関係イベントとしては、国際分科会が正式に動いているが、アジアで若手アカデミーとの連携をするような会議とか、ワークショップを3月に開催し、韓国若手アカデミー（Y-KAST）と交流をした。また、GYA、INGSAとの共催で、11月にイベントとして能力開発ワークショップを行うこととしている。
- ・イベントの運営や参加するための経費が掛かり、こういったものに使える予算が十分でないという問題がある。GYAはドイツから安定的にfundが出ているが、適宜お金集めをしている。また、他の国の若手アカデミーでも独自にfundを集めている。我々もSDGsと関連して何か予算が取れないか議論しているところである。
- ・SDGsを遂行するためには人材の育成が必要であるが、博士課程を卒業した後どこに

行ったか分からない人たちをどうするか。最終的には、産業界が、メッセージとして、高い専門性、案件遂行能力を有する人材を雇用することが考えられる。アカデミアとしては、高い専門性、案件遂行能力を有する人材を創出するということを、産業界とアカデミアの協働声明として若者へ提示したい。

- ・学部生 250 万人、大学院修士課程 16 万人、大学院博士課程 7 万人、ポスドク 7 万人と少なくなっているのが現状である。
- ・未来分科会で学振 PD の倍増を提案しているが、現在、ポスドク 15,000 人、学振 PD は 1,000 人しかおらず、全体の 10% を切っている。現状もっともフェアなポスドク審査制度であり、ここを拡充するということは多くの若手に納得できる支援であると考えている。
- ・学振 PD は、ポスドクそのものの研究テーマで取り組めるので、本邦の研究の多様性が高くなる。我が国の中で行われている研究の多様性を高く保つためにも非常に良い。
- ・必要経費として、約 5 百万円/人/円、1 年間で採用される人間が 350 名、これを 2 倍して 700 名とすると、約 20 億/年、科研費 2,000 億円/年の 1% でも回せば、サステナブルなアカデミーができ、SDGs を進めることができる。
- ・若手から、アカデミアに残らない人の選択肢、通年雇用、企業の大学講座が短期的思考に基づいている現状の打破などの課題をシニアが考える必要性の提案があった。

(2) FE と SDGs について

● 蟹江委員より、資料により説明。要旨は以下のとおり。

- ・フューチャーアースとは、持続可能な地球社会のための知を生み出す国際的研究連携のプラットフォームということで、研究に非常に重点が置かれている。対象は、地球環境の変化というフィジカルなものと、その中にいる人間と両方を対象として、そのインタラクションというものも関連している。そういう意味で対象はかなり SDGs とオーバーラップしている。
- ・フューチャーアースは研究者中心、SDGs は政府中心に進められていると言える。
- ・活動としては、人文社会科学、自然科学の連携・統合をしていこうというのが目的として一つあり、その上で社会との知の共創と共有による複合的な課題解決というのがある。そういう意味でステークホルダーとの超学際的連携をしていて、design の段階から production していき、最終的に成果を生かすというところまで含まれるということを考えると、例えば、産業界との連携というツールもあり、NGO 等をツールとして考えるというものもある。その過程でコラボレーションも大事である。中身の部分で、かなり SDGs がツールとして活用できるというところがある。
- ・フューチャーアース自体、国際的な研究計画がエラボレートして、結果、出来たものである。SDGs は、2011 年にアイデアを出して、2012 年に実際に創ろうという話になり、2 年間の考証があり、一年後まとめ上げ 2015 年に創ったというプロセスだが、その辺りのプロセスもかなりオーバーラップしている。
- ・また、SDGs を創るプロセスでは、科学的な知見を 1 年ぐらいかけてネゴシエータにレクチャーし続けていたが、そこで相談していた人にはフューチャーアースの活動に関連している人が多く含まれていた。フューチャーアースのいう科学と政策のコラボレーション、インタラクションといったところが、いいタイミングで出てきたのが、SDGs の場ではなかったかと思っている。
- ・国際的な事務局が、カナダ、アメリカ、スウェーデン、フランス、日本とあって母体となっている。日本は学術会議が母体となっており、実際に設置しているのは、東京大学の IR3S となっている。また、地域の事務局としては、アジアの事務局として京都の地球研となっている。

- ・個別のプロジェクトとフューチャーアースの活動というのは、結構、最初からどういう関係にあるのかというのが分かりにくくなっていて、フューチャーアースが、当初はいろいろなことをやってくれるはずなのに、何もやってくれないという不満が出ているような現状がある。
- ・SDG s に関しては、課題ができてから、オプションを出し、評価し、実施していくと、最終的に目標に至って、どれだけ進捗しているかモニタリングし、レビューしていくという点があるが、いろいろなサイエンスが関係して、その中のステークホルダーの一つがフューチャーアースといってもいいのではないかなと思う。

* 学術会議におけるSDG s 関連委員会・分科会の関係の図について、分かりにくいとの意見があり、渡辺委員長より、完成版でなくてよいので、たたき台となるような図を次回までに各委員から提案頂きたい旨依頼があった。

(3) SDG s と提言の紹介

- ・渡辺委員長より、学術会議のホームページで、「SDG s とのかかわりー第23期に発出した提言・報告書を中心にー」として提言等を掲載しているが、これらの提言等について英語版の要望が多方面からあるので、その作成にあたっては、各提言等を作成している委員会等にタイトルと委員会等名の英語版を依頼したいとの発言があった。
- ・ホームページ掲載では、1 提言につき1 目標を割り当てているが、他の提言も見られるよう対応したい。また、今後出す提言については、1 提言複数目標を割り当て、その関係がわかるようにするのがよいとの意見があった。
- ・SDG s の関係から、提言等を出してもらう場合のチェックシートに、SDG s の分野に関与するか、英文タイトルはあるかということの追加を検討することとなった。
- ・本委員会として、SDG s がフォローしている以外の部分について提言して行くこととなった。
- ・SDG s 取り組みの意義の1 つには学術会議の体質改善がある。分野別委員会がその分野の必要性を訴えることが中心であった従来から、分野を超えて課題を検討し提言することの比重を増やすことを体質改善とすべきとの発言があった。

(4) SDG s の最近の動向について

- ・個別の議論なし。

(5) 提言のチェックシート及びチェックシートの変更について

- ・課題別審議等査読分科会において、検討することで了承された。

(6) アジア学術会議におけるセッション企画について

- ・渡辺委員長より、今回の委員会の場で議論する時間がないので、メンバーから手を挙げてもらい、そのメンバー（遠藤委員（第一部会員）、沖先生（連携会員）、西嶋先生（連携会員））で打ち合わせをし、SDG s の次に来るもの、SDG s では捉えることのできないような学術として大事な課題は何かということセッションで行うことを考えている旨の報告がされた。

(7) 主張が異なる提言や報告の配慮や調整について

- 資料6 の質問状で指摘されている通り、一つのことについて異なる意見の提言等が出てくる場合がある。学術会議として、今後、このように対してどう対応すべきかについて審議がされた。要旨は以下のとおり。

- ・研究の世界では、主張が異なることは当たり前にある。従って、個人的には、学術会議としては、仮に主張がぶつかっても、それぞれが独自の提言等を出していいのではないかと考えているが、それでは問題があり、無理矢理一つの提言等に統合し、結果として間違っていた場合は謝罪する、という考えもある。様々な観点がある課題であり、いろいろ議論しないといけないと思っている。
- ・査読の段階で、チェックを厳しくすべきであり、提言等のチェックシートの「9. 既出の提言等との関係」に、既出の関連提言等の具体的情報を記載するなどしつつ、提言等を世に問うという形しかないと思う。
- ・チェックシートに既出の関連提言等を書いて欲しいと言っても、学術会議が発出している提言等は非常に多い。その提言等が扱ったテーマに関連する過去の提言等を洗い出すのは現実的には難しいのではないかと。
- ・本件については、本委員会で継続審議することとされた。幹事会附置委員会「危機対応科学情報発信組織準備委員会」との整合も必要であり、その委員長である高橋幹事が中心となって検討することとなった。

(8) 今後の委員会検討体制について

- ・「日本の展望」の2020年版の作成に当たって、本委員会と若手アカデミーと連携し、議論するため、本委員会に新たに分科会を設置することが提案され、了承された。
- ・提言等のチェックは課題別審議等査読分科会で行うことになるので、当該分科会を10月総会中に開催することが提案され、了承された。

(9) サイエンスアゴラ2018の後援に係る審議付託について

- ・特に問題なく、後援を行って良い旨が了承された。

(10) その他

- ・次回、総会時の10月4日（木）12時から13時30分に開催することとし、次々回は、12月6日（木）13時から15時30分に開催することとされた。
また、当日アジア学術会議が開催され、16時から本委員会の主催セッションが行われるため、委員への出席依頼が行われた。

以 上